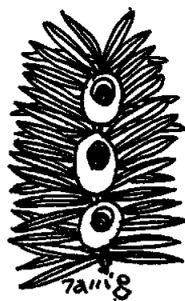


観光開発と自然破壊

年代ははっきりわからないが、十数年前から日本人の自然観が変ったような気がする。原始の自然、あらゆる自然、人工の加わらぬ自然を求めて、人びとが奥地へ奥地へと入りこむようになった。北海道の観光ブーム、沖縄や各地の離島へ人びとがおしかけるようになったのも、そうした傾向のあらわれだと思われる。

戦前の日本人が美しい風景だと考えたのは、おもに日本三景的なものであった。たとえば天の橋立や松島のような箱庭的な自然であり、宮島のような人工の造営物と自然との調和のとれた風景であった。しかし今の若い人たちは、日本三景そのものや、日本三景的な風景にひかれるとはとうてい考えられない。

私たち都会に住んでいる人間は、コンタリットと鉄とアスファルトで構築された環境に耐えられぬ息苦しさをおぼえている。都市には一片の土もなく、川らしい川もな



い。埃りにまみれた木々と汚れた空しかな。新幹線の窓から眺めると、その沿線のほとんどがコンタリットの建物と、工場に占領されていることがわかる。

フライパンでいためた豆が、はじめてフライパンを飛びだすように、都会の人間は息苦しさに耐えかねて、コンタリットとアスファルトの都会から脱出したい衝動に駆り立てられる。これは生きものの本能的な衝動だろうと思う。

都会から脱出した人びとが求めるのは、純粋な自然である。人間の手が全くくわわらぬ原始のままの自然である。北海道へ人びとがおしかけるのも、北海道にはもともと原始的な自然が残されているからであろう。大雪をめぐる針葉樹林、根室一帯の湿原、エリモ岬の荒い海と岩石のたたずまい野付半島の砂丘と青ぐろい北の海などが私の眼底にやきついていく。そういう自然の風景のなかにいると、都会の生活でささくられた神経がなごみ、人間は自然を離れては生きられぬ生き物であることが実感でわかってくる。

都会生活が過密となるのに比例して、人

間は原始自然を求める。箱庭的、盆景的な自然では満足できなくなる。その結果、人から遠ざかった奥地へ奥地へと人びとは入りこむことになる。ところが困ったことには、観光事業も、こうした人間の要求にこたえるように、奥地へ奥地へと侵入する傾向をもちはじめた。山の中に道路を新設し、山肌を赤むけにし、ブルトリーザで土砂を谷川へ投げすてる。鉄筋コンタリットのホテルを建て、山を削って駐車場やボーリング場をつくる。その結果、ゴミは山積し、生活排水で溪流は汚染する。その自然が純粋で、原始的であればあるほど、破壊の爪あとは残酷である。

こんな話をきいた。立山や乗鞍に自動車道路ができ、雷鳥などの山の生物が絶滅してしまった。他の土地から雷鳥のヒナを移入しても、すぐに根絶やしになってしまった。その原因を調べてみたら、車で大勢の人間が入りこみ、弁当がらを山にすてる。その残飯をねらって麓からネズミが道を伝って山頂へあがり、そのネズミを追って野良猫が山へ入りこむ。その猫のため雷鳥が捕食されるということだった。直接的な害のほか、その場所が原始的であればあるほど、被害の程度は大きいのである。

観光開発は、自然を破壊するばかりか、観光そのものを破壊する。観光価値を破壊する観光開発——世の中でこれほど馬鹿げたことはすくないであろう。しかしこの馬鹿げたことが、日本の各地で続々とおこなわれているのだ。

つい十年ほど前、日本のいたるところで工場誘致計画のブームがおこった。どの県でもどの都市でも、海岸を埋め立て、石油コンビナートや製鉄工場を誘致するのに大奮であった。地方を旅行すると、知事室や市長室の壁には工業開発の予定計画や、工場誘致によってその地方がいかに繁栄するかの統計類がところせましと掲げられていた。そして知事や市長が口角あわを飛ばすいきおいで開発計画を説明し、いかにも切れる者らしい開発室長なる人物がとうとうと未来計画についてレクチュアをしてくれるのであった。そのうえ馬に喰わせるほどのパンフレットを土産にくれ、旅のカバンが重くなって弱ったものである。

これらの工業開発計画なるもの大半は知事や市長の見果てぬ夢におわった。そして儲けたのは計画に参与した大学の教授や

美しい多色刷りのパンフレットを印刷した中央の印刷会社だけだったという皮肉な現実にとどまってしまう。

だが夢が挫折したところはまだよい。工場誘致に成功した場所は、その後、公害問題に苦しめられ、また急膨張した人口のために、教育施設、上下水道その他の施設費で、新しい税収入以上の失費に苦しまねばならなかった。

そして十年後の今日、工場誘致ブームにかわって、観光開発ブームが日本の各地でわきおこっている。工場がダメなら観光でいこう、これが各地の知事、市長、町長さんの発想であるらしい。その性こりのなさにはあきれられるばかりだが、やはり票かせぎということでは軌を一にしているのである。こうした観光開発が観光破壊につながることは、遠からずわかることだと思われる。

最近、伊勢志摩国立公園の入口である鳥羽市へ行ってみた。鳥羽湾は、三木本幸吉翁によって開拓された真珠養殖発祥の地だが、現在、鳥羽の海では真珠は全く育たない。四日市、名古屋の工業排水のせいでも

あるが、この町を埋めつくしているホテルや旅館の排水が海を汚染し、富栄養にすぎたせいだといわれている。それなのに市当局ではパール・ロードを建設し、より多くの観光客を迎え入れようとしている。ここには西武、近鉄、名鉄などの外来資本と県や市が合体してつくった第三セクターとよばれる観光開発公社が三つも乱立し、ホテル、ゴルフ場、別荘地などの開発をどしどし進めている。第三セクターというのは悪い文句は別として、大企業の金力と地方自治体の権力とが複合したもので、公共の美名のもとに強引な開発がおこなわれているのである。

観光開発が必ずしも地方の繁栄につながるのではないのは、今日の観光事業は巨大資本による巨大開発だからである。そのため外来資本が導入されて地元資本は排除され、圧倒されるか、外来資本の系列化するかの選択だけがゆるされている。また過疎対策の美名のもとに、過疎地の青年子女はウェイトレス、ボーイ、パーテン、キャディなどに雇われているにすぎない。大人はホテルやゴルフ場の草むしりくらの役しか与えられないと聞いた。そういう雇用形態のもとでは、人々は荒

廃し、都会風、レジャー風の根なし草の人情におちいるばかりであるらしい。観光は生産に直接むすびつかない娯乐的、消費的なものだからである。観光地へきている人間は、生産の余暇に観光をたのしんでいるだけだが、観光企業の従業員たちは、その一面だけを身近で見聞するため、消費的、娯乐的価値感だけがむやみと肥大するのである。

この随想には、別に結論めいたものがあるわけではない。十数年前に工場誘致が地方を繁栄させる唯一の手段のように宣伝され、多くの害悪をのこしてしまっただが、それと同じパターンの考え方で、いままた観光開発がさげばれているのに腹立たしい思いがするのである。

工業開発は公害をうむ。それならこんどは観光開発でいこう。観光開発なら誰も文句はいうまいという発想が地方自治体にはある。そうした発想の底に携わっているのは、観光開発で成績をあげ、つぎの選挙で票をかせこうという自治体首長たちの胸算用である。ところが、自治体の予算だけでは賄えぬから、外来の大資本とむすびつき

第三セクターという仮面をかぶった狼をつくりあげる。そして自治体先導のもとに、地元民を説得して観光大資本に土地を買い漁らせる。あるいは市町村の所有地を企業に売り渡す。さらに企業は何倍かの値段で都会の金持たちに土地を分譲する。山や林は切りひらかれ、別荘の生活排水が谷川や海を汚染して、たとえば漁業に大打撃をもたらせる。

工業開発で、これまで地方自治体は苦い体験をしたはずだ。そこで工業から観光へ政策転換をしたわけだが、そこに一貫して深めている思想は、企業優先の考え方であつて、口先では自然優先、人間尊重などといっているが、これは通りいっぺんの念仏にかすぎない。実際は、観光開発という名の企業優先なのである。

自然保護運動は、こうした考え方とたまたかわねばならない。金儲け第一の観光企業とたたかうだけでなく、地方自治体もまたかわねばならぬ。そこに、この運動の困難さがある。しかしそうしないかぎり、日本のかげがえのない自然は、大幅にこわされてゆくのである。

(評論家)